

古英語動詞体系を歴史・比較言語学的に考察する (2)

田中, 俊也
九州大学大学院言語文化研究院

<https://doi.org/10.15017/7170865>

出版情報：英語英文学論叢. 74, pp.1-21, 2024-03-14. Department of English, Faculty of Languages and Cultures, Kyushu University

バージョン：

権利関係：



古英語動詞体系を歴史・ 比較言語学的に考察する*（2）

田中俊也

2. 古英語動詞体系における強変化動詞

第1節において次のことを確かめた。英語の動詞の活用は2つの時制（**tense**）、3つの法（**mood**）の区別に従うものであり、主語の人称（**person**）と数（**number**）によって異なる活用語尾を取る。また、定形（**finite forms**）としての動詞本来の活用に加えて、非定型（**non-finite forms**）として、不定詞（**infinitives**）と分詞（**participles**）の活用もある。英語の動詞は4つのグループに分類することができ、それらは強変化動詞（**strong verbs**）、弱変化動詞（**weak verbs**）、過去現在動詞（**preterite-present verbs**）、変則動詞（**anomalous verbs**）である。以下では、これらの4つのグループの動詞の活用にどのような特徴があり、古英語から中英語、そして近代英語（および現代英語）が発達する際に、それらの特徴がどのように受け継がれたか、あるいはどのように変化したかについて考察したい。まずは、強変化動詞に焦点を当て、それに続いて、弱変化動詞、過去現在動詞、変則動詞について扱うことにする。

2.1. 古英語強変化動詞の活用の特徴

古英語の強変化動詞はその活用パターンによって7つのグループに下位分類することができる。以下に、具体的な特徴を観察したい。

1.2節では、古英語の強変化動詞について、次のように説明した。

強変化動詞（**strong verbs**）。現代英語の *drive* [aɪ] — *drove* [oʊ] — *driven* [ɪ] のように、動詞語幹の母音（stem vowel）が変化することによって、原形（あるいは現在形）、過去形、過去分詞の活用を表す

* 本研究は JSPS 科研費19K00553, 23K00525の助成を受けたものである。本研究は3部に分けて公開されるもので、本稿はその2番目の部分となる。

動詞を強変化動詞と呼ぶ。このように強変化動詞の活用に観察される語幹母音の変化は、**アプラウト**あるいは**母音交替 (ablaut or vowel gradation)**と呼ばれ、これはインド・ヨーロッパ祖語において語形成や、語の活用形を形成する際に用いられる形態的な手段であったと考えられている。古英語において強変化動詞は312あってかなり生産的 (productive) だったものの、そのうち現代英語に受け継がれたものは66に限られている (中尾 1979: 134; 中尾、寺島 1988: 58-59)。強変化動詞は更に I-VII 類に下位分類され、4つの主要部 (4 principal parts) を持つといった詳細については、第2節で扱うことにする。

強変化動詞の特徴として最も重要なことは、**アプラウト**即ち**母音交替**によって、**不定詞 (infinitive)**、**過去単数 (preterite singular)**、**過去複数 (preterite plural)**、**過去分詞 (past participle)** の4主要部 (4 principal parts) を区別するということである。アプラウト即ち母音交替のパターンが大別して7種類あるため、強変化動詞はI類からVII類までの7つのグループに下位分類されることになる。

古英語の強変化動詞の活用形は、当該の強変化動詞の4主要部がわかればそこから派生することが可能である。それは、現代英語の不規則変化動詞 (irregular verbs) の活用形を得るために、3主要部となる原形、過去形、過去分詞 (例: drive [drárv], drove [dróuv], driven [drívn]) を知る必要があるのと、同様である¹。

1.1. 節で、helpan ‘help’ の活用表を見た。本節では、強変化動詞 helpan の4主要部をもとにして、この活用表にあるすべての形を導くことができることを確認したい²。

不定詞³から現在形の活用形を形成することができる。不定詞 helpan の

-
- 1 古英語の強変化動詞に存在した過去単数形と過去複数形の区別は、中英語期の間に失われるようになった。Wright and Wright (1928: pp.178-179 §394.5)、中尾 (1972: 166-167; 1979: 143)、中尾、寺島 (1988: 117)、Lass (1992: 132-133)、Welna (2017: pp.64-68 §3.3) などを参照。
 - 2 古英語 helpan ‘help’ は母音交替によって活用する強変化動詞だったが、中英語期に歯音過去を形成する弱変化動詞へと変化した。中尾 (1972: 168)、中島 (1979: 176-177)、Lass (1992: 133) などを参照。

語尾 -an を取り払った形 help- に、直説法現在の人称語尾 -e (1 人称単数)、-est (2 人称単数)、-eþ (3 人称単数)、-aþ (複数) を付けると、次の活用形を得ることができる: ic helpe (1 人称単数形)、þū *helpest (2 人称単数形)、hē(o)/hit *helpeþ (3 人称単数形)⁴、wē/gē/hīe helpaþ (複数形)。同様に、help- に接続法現在の人称語尾 -e (単数)、-en (複数) を付けると、次の活用形を得ることができる: ic/þū/hē(o) helpe (単数形)、wē/gē/hīe helpen (複数形)。また、(対格) 不定詞の形に基づいて、与格不定詞を形成することもできる。不定詞 helpan の語尾 -an を除いた形 help- に tō ...-enne を付けると、tō helpenne (与格不定詞) となる。加えて、不定詞の形に基づいて現在分詞も形成できる。不定詞 helpan の語尾 -an を除去した形 help- に -ende を付けると、helpende (現在分詞) となる。

古英語の強変化動詞では過去形に 2 つの形態があり、過去単数形と過去複数形の区別があったということは重要である。過去単数形の healp は、直説法 1 人称単数過去と直説法 3 人称単数過去に用られる: ic healp (1 人称単数)、hē(o)/hit healp (3 人称単数)。これに対して、過去複数形の hulpon から、まずは直説法 2 人称単数過去形を形成することができる: 過去複数形 hulpon からその人称語尾 -on を取った形 hulp- に人称語尾 -e を付けると、þū hulpe (2 人称単数形) となる⁵。過去複数形の hulpon は直説法複数過去にも用いられ、wē/gē/hīe hulpon (複数過去) となる⁶。更に、過去複数語幹 hulp- は接続法過去形全般に用いられる: ic/þū/hē(o) hulpe (単数形)、wē/gē/hīe hulpen (複数形)。

過去分詞 holpen は第 1.1 節で見たように、接頭辞 ge- なしにそのままの

3 ここで言う「不定詞」は対格不定詞 (accusative infinitive) のことであり、現代英語の原形不定詞に当たる。これに対し、与格不定詞 (dative infinitive) to helpenne 'to help' が現代英語の to 不定詞に相当する。

4 1.1 節で論じたように (特に当該節の脚注 18 参照)、2 人称単数形 *helpest および 3 人称単数形 *helpeþ は想定上の形で、実際に生じるのは、語幹の母音が i-ウムラウトを受けた 2 人称単数 hilpst と 3 人称単数 hilpp などの形である。ただし中英語期になると、類推による水平化 (analogical leveling) によって、2 人称単数形 helpest および 3 人称単数形 helpeþ が見られるようになる (Wright and Wright 1928: p.178 §394.1 などを参照)。「類推による水平化」については、本節の脚注 13 も見られたい。

5 直説法過去 2 人称単数形を形成するのに過去複数形の語幹を用いるのは、西ゲルマン語の特徴である。第 1.1 節の脚注 20 を参照。

形で過去分詞として用いることができる。(無論、ge- が付いた geholpen [jehólpen] も、過去分詞として用いることができる。)

このように4つの主要部がわかれば、当該の強変化動詞のあらゆる活用形を得ることができる。ただし、注意を払うべき点もある。強変化動詞の直説法2人称および3人称単数現在形では、一般に動詞語幹の母音がI-ウムラウトを経た形態が生じるという点である。古英語(ならびにゲルマン語一般)の強変化動詞の現在形は、インド・ヨーロッパ祖語の語幹形成母音による現在形(**thematic presents**)を受け継いだもので、それらは元々 *-ō (1人称単数)、*-e-si (2人称単数)、*-e-ti (3人称単数)、*-o-nti (3人称複数)⁷という語尾を持っていた⁸。これらの人称語尾は、ゲルマン祖語では *-a (1人称単数)、*-is (2人称単数)、*-ip (3人称単数)、*-anþ (3人称複数) へと(音)変化した。ここで問題となるのは、*-i- という音を含んでいる2人称単数語尾の *-is と3人称単数語尾の *-ip である。これらの語尾にある *-i- が、古英語期に至るまでに語幹の母音に影響を与えてI-ウムラウトを引き起こすこととなったのである。動詞 help- であれば、語幹の母音 -e- がI-ウムラウトによって -i- に変化する(即ち、hilp- となる)。この音変化を生じさせた後、人称語尾の中にあった母音 *-i- は消失して、2人称単数現在形 hilps [hílps], 3人称単数形 hilpp [hílpθ] が生じる。動詞語幹内のどのような母音がI-ウムラウトを受けてどのように変化するかについて、次に示すように11のパターンがある(市川、松浪1986: pp.34-35 §5.4.2)⁹ :

6 人称語尾 -on (< -un) は元々3人称複数形のものであり、元々の3人称複数過去形が古英語では複数過去形一般に用いられるようになった。古英語の古いテキストでは、強変化動詞の過去複数形に元々の3人称複数形語尾の -un を残した例も見られる。この点については、Campbell (1959: p.302 §735(e)), Hogg and Fulk (2011: p.223 §6.22) などを参照のこと。

7 インド・ヨーロッパ祖語の動詞の能動現在形本来の人称語尾は、2人称単数が *-s-, 3人称単数が *-t-, 3人称複数が *-nt- であった。現在形の人称語尾に見られる *-i- は、元々「ここでそして今 (hic et nunc)」という意味を表す小辞であったと考えられている(Tichy 2006: 88, Weiss 2009: 384などを参照)。これに対して、*-e/o- は語幹形成母音(**thematic vowel**)と呼ばれるものである。

8 Weiss (2009: 395) などを参照。例えば、ラテン語の第三変化動詞 agēre 'lead, do' の直説法現在形にこれらの人称語尾の直接的な反映が見て取れる: agō 'I lead, do', agis 'you lead, do', agit '(s)he leads, does', agunt 'they lead, do'。

(1)

- a. a > æ faran (VI) ‘go’: færst, færþ
- b. a (+N) > e standan (VI) ‘stand’: stentst, stent
- c. ā > æ cnāwan (VII) ‘know’: cnæwst, cnæwþ
- d. e > i helpa (III) ‘help’: hilpst, hilþ
- e. u > y cuman (IV) ‘come’: cymst, cymþ
- f. ū > y brūcan (II) ‘enjoy’: brȳcst, brȳcþ
- g. ō > ē grōwan (VII) ‘grow’: grēwst, grēwþ
- h. ea > ie feallan (VII) ‘fall’: fielst, fielp
- i. ēa > īe hlēapan (VII) ‘leap’: hlīepst, hlīepþ
- j. eo > ie weorpan (III) ‘throw’: wierpst, wierþ
- k. ēo > īe smēocan (II) ‘smoke’: smīecst, smīecþ

強変化動詞の直説法現在 2 人称および 3 人称単数形は、動詞語幹の母音が -i-, -ī-, -ie-, -īe-, -æ- である場合を除いて、一般的に I-ウムラウトを受けた形が生じると理解できる。また、音変化の結果元々の形を見て取ることが困難な場合もある¹⁰。

さて、2 人称単数現在形の語尾が (少なくとも元の形は) -est となる点について、ひとつ疑問が残る。ひとつ上の段落で述べたように、ゲルマン祖語での強変化直説法現在 2 人称単数形の語尾は *-is であった。強変化直説法 2 人称単数現在の語尾は、東ゲルマン語のゴート語でも -is である。古英語と同じく西ゲルマン語に属する古高ドイツ語でも、最古のテキストでは -is であって、9 世紀から -ist, -est などのように -t が付いた形が生じるようになった (Braune and Reifenstein 2004: 261などを参照)。このように、元々は無かった -t がなぜ古英語や古高ドイツ語の強変化直説法 2 人称単数現在の語尾に付いたのであろうか。これまでに提案されて

9 類似の、より詳細な資料を与えているものに小野、中尾 (1980: 245) がある。

10 現代ドイツ語の強変化動詞も古英語の強変化動詞と似た性質があり、直説法現在 2 人称および 3 人称単数形で I-ウムラウトを受けた語幹母音を示すことが多い (例 helfen ‘help’: ich helfe, du hilfst, er/sie hilft, wir/Sie helfen, ihr helft)。また、直説法現在 2 人称および 3 人称単数形の人称語尾が、音変化を反映する形となっている例も見られる (例 laden ‘load’: ich lade [lá:də], du lädst [lé:tst], er/sie lädt [lé:t])。三好 (1977: 92-93) などを参照。

きた伝統的な説は、二人称単数代名詞の *pū* が前接語 (enclitic) として、直説法 2 人称単数現在形とともにあたかも一語であるかのように発音された結果、直説法 2 人称単数現在形の語尾が *-est* に再解釈されたというものである: *rīdes pū* ‘dost thou ride’ > *rīdestu*¹¹ (Campbell 1959: p.297 §731 などを参照)¹²。

2.2. 古英語強変化動詞の 7 つのクラスとその形態的特徴

続いて、強変化動詞は母音交替 (アプラウト) のパターンに従って、7 つのグループに下位分類されるということを確認したい。しかし、このことについては、但し書きが必要である。古英語では強変化 I 類から VII 類までのすべての動詞が母音交替 (アプラウト) によって、不定詞、過去単数形、過去複数形、過去分詞の 4 主要部を区別する。しかしながら、ゲルマン祖語では、第 VII 類だけは母音交替 (アプラウト) によるのではなく、畳音 (あるいは重複; **reduplication**) の有無によって、不定詞、過去単数、過去複数、過去分詞を区別していた。このことが何を意味するか、本節の終わりに説明する。

強変化 I 類から VII 類までのそれぞれのグループに固有の母音交替 (アプラウト) のパターンは、強変化動詞の形態によって定まるものであった。古英語では音変化によってこのことがややわかりにくくなっているが、ゲルマン祖語 (あるいはそれより少し前) までさかのぼると、このことがよくわかる。このことも考慮に入れて、以下に強変化 I 類から VII 類の活用の特徴を考察してみよう。また、任意の母音を V で表し、任意の子音を C で表し、共鳴音 (半母音 [j, w], 流音 [l, r], 鼻音 [m, n]) を R で表し、阻害音 (摩擦音または閉鎖音) を T で表すものとする。

強変化 I 類の古英語での母音交替 (アプラウト) は、*ī, ā, i, i* である。具体例を観察しよう。例えば ‘drive’ *drīfan* [dri:vən], *drāf* [drá:f], *drifon* [drívon], *drifen* [dríven] は、この母音交替を示す動詞である¹³。この母音

11 古英語では *-sp-* という子音連鎖は規則的に *-st-* に (音) 変化した (Campbell 1959: p.193 §481(1), Hogg and Fulk 2011: p.219 §6.13 (g) などを参照)。

12 古高ドイツ語の対応例は、Braune and Reiffenstein (2004: p.261 Note 5) などを参照。また、ここに記した伝統的な説明とは異なる近年の説明については、Ringe and Taylor (2014: 353-355), Fulk (2018: 274-275), Fertig (2019) などを参照。

交替 (アプラウト) にどのような規則があるのか、ここからではわかりにくい、ゲルマン祖語 (かそれより少し前) にさかのぼるとよくわかる。ゲルマン祖語の ‘drive’ という動詞は、*drīfan (< *dreifan), *draif, *dribun, *driben と活用した¹⁴。ゲルマン祖語の不定詞 *drīfan は前ゲルマン祖語 (pre-Proto-Germanic) の *dreifan から音変化によって発達したものである。従って、この動詞の元々の母音交替 (アプラウト) は、*ei, *ai, *i, *i だったとわかる。*-i- の部分が共通なので、ここから次のように一般化することができる: (前) ゲルマン祖語において *CeIC- という語幹の形態を持つ動詞は強変化 I 類に属し¹⁵、*e, *a, zero, zero という母音交替 (アプラウト) を示す。つまり、*CViC- が強変化 I 類に属する動詞の語幹の形であり、その V の部分が *e, *a, zero, zero と交替するというものが、強変化 I 類動詞の活用の本質だと言える。

強変化 II 類の古英語での母音交替 (アプラウト) は、*ēo*, *ēa*, *u*, *o* がそ

-
- 13 現代英語の drive — drove — driven に、古英語強変化 I 類活用の名残を見ることが出来る。古英語不定詞の drīfan [dri:vən] は中英語 drīve(n) [dri:və(n)] に受け継がれ、大母音推移によって初期近代英語の drive [draɪv] が発達する。古英語過去単数形 drāf [dra:f] は音変化により、中英語過去形 drov(e) [dró:v] に受け継がれる。語末の摩擦音は、不定詞や過去分詞に倣って有声化した。これは「類推による水平化 (analogical leveling)」と呼ばれる変化である (Hock 1991: pp.168-171 §9.1.1; Campbell 2013: pp.93-95 §4.3; Bybee 2015: pp.94-97 §5.3 など) を参照)。また、元々の過去単数形が中英語期の間に過去形に一般化された。大母音推移を経て、初期近代英語の drove [dró:v] が発達する。18世紀頃の二重母音化によって drove [dróov] と発音が変化して、現代英語に受け継がれている。古英語過去分詞 drifen [driven] は中英語 driven [drivən] に受け継がれ、初期近代英語で driven [drivn] となった。
- 14 ゲルマン祖語では、語幹末の子音が唇歯摩擦音の [f, v] はなくて、両唇摩擦音 [Φ, β] だった可能性がある。不定詞 *drīfan [dri:Φən] (< *dreifan [drérΦən]) と過去単数形 *draif [dráɪΦ] については、アクセントが語頭位置に固定される前の時代から第 1 音節にアクセントがあったために、語幹末の摩擦音がヴェルナーの法則 (Verner's law) による有声化を受けず、無声音の [Φ] が保たれた。これに対して、過去複数形 *dribun [drɪβən] と過去分詞 *driben [drɪβən] は、アクセントが第 1 音節に固定される前の時代には語尾にアクセントがあったために、ヴェルナーの法則による有声化を受けて、有声音の [β] が生じた。
- 15 語頭の子音は 1 つの場合もあれば 2 つの場合もあるので (cf. bīt- ‘bite’ vs. drīf- ‘drive’), (C)CeIC- と表記するのがより正確だと言える。だが、煩瑣になるのでここでは CeIC- と表記する。

の本来のパターンである¹⁶。具体例を見よう。‘choose’ *cēosan* [tʃé:ozan], *cēas* [tʃé:as], *curon* [kóron], *coren* [kóren] は強変化II類に属す動詞である。この母音交替（アプラウト）にどのような規則があるのか、このままではわかりにくい、ゲルマン祖語にさかのぼるとよくわかるようになる。ゲルマン祖語の‘choose’という動詞は、**keusan* [kéusan], **kaus* [káus], **kuzun* [kózun], **kuzen* [kózen] と活用した¹⁷。従って、この動詞の元々の母音交替（アプラウト）は、**eu*, **au*, **u*, **u* だったと理解できる。**-u-*の部分が共通なので、ここから次のように一般化することができる：ゲルマン祖語において **CeuC-* という語幹の形態を持つ動詞は強変化II類に属し、**e*, **a*, *zero*, *zero* という母音交替（アプラウト）を示す。つまり、**CVuC-* というのが強変化II類に属する動詞の語幹の形であり、そのVの部分が **e*, **a*, *zero*, *zero* と交替するというのが、強変化II類動詞の活用の本質だと言える。

16 このクラスに属するもうひとつの母音交替のパターンとして、*ū*, *ēa*, *u*, *o* がある。具体的には、*brūcan* ‘use, enjoy’, *būgan* ‘bend’, *lūcan* ‘lock’, *strūdan* ‘rob’, *sūcan* ‘suck’ などがある。Campbell (1959: p.309 §740)、Brunner (1965: pp.295-296 §385)、市川、松浪 (1986: 38-39)、Hogg and Fulk (2011: p.237 §6.48)などを参照。このような動詞の不定詞に母音 *-ū-* を示すのは、強変化I類動詞との類推によるものだという説が有力である (class I inf. *-ī-* : pp. *-i-*, class II inf. X : pp. *-u-*, X = *-ū-*; Prokosch 1939: pp.149-150などを参照)。このような伝統的な見解とは異なる説明を試みたものとして、Vine (1985)、Perridon (2001) などがある。

17 脚注14で述べたように、ゲルマン祖語より前の時代（アクセントが第1音節に固定するより前の時代）にさかのぼると、不定詞と過去単数形は動詞語幹にアクセントが置かれているのに対して、過去複数形と過去分詞は語尾にアクセントが置かれていた。そのため、不定詞と過去単数形の語幹末の摩擦音 **-s-* はヴェルナーの法則による有声化を受けずに、無声摩擦音 [s] のままであった。他方、過去複数形と過去分詞はヴェルナーの法則による有声化を受けて、有声摩擦音 [z] が生じた。ゲルマン祖語の [z] は、北西ゲルマン語で [r] に変化した。これは、ロータシズム（あるいはR音化；*rhotacism*）と呼べる音変化である。(Prokosch 1939: pp.84-85 §28, Hogg 1992: p.74 §4.15などを参照。) 古英語の過去複数形 *curon* および過去分詞 *coren* の語幹末に見られる [r] は、このロータシズムによって生じたものである。なお、古英語の過去分詞 *coren* ‘chosen’ の語幹の母音 *-o-* は、過去分詞固有の語尾 *-en* にある中母音 (mid vowel) [e] の影響で高母音 [o] が中母音 [o] に変化することによって生じたものである (Wright and Wright 1925: 28 and 58; Campbell 1959: 43; Hogg 1992: 55-56などを参照)。

強変化 III 類の古英語での母音交替（アブラウト）には幾つかのパターンがあるが、**e, ea, u, o** がその代表例であると仮定して考えてみよう¹⁸。具体例として、‘help’ *helpan* [hélpan], *healp* [hæalp], *hulpon* [hólpon], *holpen* [hólpen] を考察したい。この母音交替（アブラウト）にどのような規則があるのか、ここからではわかりにくい、ゲルマン祖語（かそれより少し前）にさかのぼるとよくわかるようになる。ゲルマン祖語の‘help’ という動詞は、**xelpān*, **xalp*, **xulpun*, **xulpen* と活用した¹⁹。従って、この動詞の元々の母音交替（アブラウト）は、**el*, **al*, **ul*, **ul* だったとわかる。ゲルマン祖語よりも前の時代（グリムの法則が適用される前の時代）にさかのぼると、この活用は **kelb-an*, **kalb*, **k|b-nt*, **k|b-en* であったと考えられる。ここで流音 [l] や鼻音 [n] を表す文字の下に黒点を打っているのは、それが成節的である (syllabic) ことを表している²⁰。これらの 4 つの形を観察すると、*-l- の部分が共通なので、ここから次のように一般化することができる：前ゲルマン祖語において *CeRC- という語幹の形態を持つ動詞は強変化 III 類に属し、**e*, **a*, *zero*, *zero* という母音交替（アブラウト）を示す。つまり、*CVRC- というのが強変化 III 類に属する動詞の語幹の形であり、その V の部分が **e*, **a*, *zero*, *zero* と交替するというのが、強変化 III 類動詞の活用の本質だと言える。

さて、強変化 IV 類以降に進むのをしばし待って、ここで強変化 I～III

-
- 18 このパターンが生じるのは、動詞の語幹が CVIC- となっている場合（つまり、語幹母音の後ろに -l- ともう 1 つの子音が続いている場合）に限られる。強変化 III 類動詞の他のアブラウトのパターンについては、Campbell (1959: pp.310-312 §741)、Brunner (1965: pp.296-300 §§386-389)、市川、松浪 (1986: 39-41)、Hogg and Fulk (2011: pp.239-243 §§6.51-6.57) などを見るとよい。
- 19 ゲルマン祖語（あるいはグリムの法則が適用された後の時代）では、この動詞の語頭子音は声門摩擦音 [h] というよりも、軟口蓋摩擦音 [x] であったと考えられる。
- 20 「成節的である (syllabic)」というのは、その分節音が音節の核 (nucleus) となり、自ら音節を形成することができるということを意味する。従って前ゲルマン祖語の過去複数形 **k|b-nt* や過去分詞 **k|b-en* は 2 音節であったことが理解できる。前ゲルマン祖語の成節的な [l] は、規則的にゲルマン祖語の [ul] に (音) 変化する。ゲルマン祖語では [u] という母音が [l] の前に挿入されて、その母音が音節の核を担えるように変化した。前ゲルマン祖語の成節的な共鳴音 **R* (= **ŕ*) はすべて、ゲルマン祖語で **ur* に発達した。

類動詞の活用を考察した結果わかったことを、簡潔にまとめておきたい。強変化 I~III 類に固有の動詞語幹はそれぞれ、(ゲルマン祖語あるいは前ゲルマン祖語で) *CeIC-, *CeuC-, *CeRC- であり、そこにおける母音 -e- の部分が、*e, *a, zero, zero と交替するのが、当該の強変化動詞の活用となる。(前)ゲルマン祖語の母音交替 *e, *a, zero は、インド・ヨーロッパ祖語の母音交替 *e, *o, zero にさかのぼる。(つまり、インド・ヨーロッパ祖語の *o は、ゲルマン祖語の *a に(音)変化した。)先に述べたように、ゲルマン語の強変化動詞の現在形はインド・ヨーロッパ祖語の現在形、特に語幹形成母音による現在形 (thematic presents) にさかのぼると考えられている。この語幹形成母音による現在形の特徴のひとつは、語幹が e- 階梯 (e-grade) の母音を持つ (即ち、母音 e を持つ) ことである。この特徴がインド・ヨーロッパ祖語からゲルマン祖語にそのまま受け継がれていると言える。

ゲルマン祖語の強変化動詞の過去形 (過去単数形と過去複数形) は、インド・ヨーロッパ祖語の完了形 (perfect) にさかのぼるというのが、比較言語学での古典的な定説となっている²¹。インド・ヨーロッパ祖語の完了単数形 (perfect singular) は、畳音 (reduplication) + o- 階梯の動詞語幹 + 完了形固有の語尾 (perfect endings) から形成されていた²²。(アクセントは、語幹の母音に置かれていた。)例えば、*le-lóik^w-a (> ギリシア語 λέ-λοιπ-α = lé-loip-a) 'I have left', *le-lóik^w-tha (> ギリシア語 λέ-λοιπ-θα = lé-loip-tha) 'you have left', *le-lóik^w-e (> ギリシア語 λέ-λοιπ-ε = lé-loip-e) '(s)he has left' がそれに当たる。ゲルマン語の強変化動詞の過去単数形は、この完了単数形から畳音を失った形を継承したと考えられている。他方、インド・ヨーロッパ祖語の完了複数形 (perfect plural) は、畳音 (reduplication) + ゼロ階梯の動詞語幹 + 完了形固有の語尾 (perfect endings) から形成されていた。(アクセントは、完了形固有の語尾に置かれていた。)例えば、*le-lik^w-fs (→ ギリシア語 λε-λοιπ-ᾱσι = le-loíp-āsi)

21 Prokosch によれば、この説は元々 Jacob Grimm によって唱えられたものだということである。2.3 節でも触れるように、Prokosch (1939: pp.160-164 §§56-57) はこの説を「標準理論 (standard theory)」と呼びながらも、批判的考察を行っている。

22 インド・ヨーロッパ祖語の完了形を形成する畳音は、語幹頭の子音 + 母音 e で構成された。

‘they have left’ がそれに当たる²³。ゲルマン語の強変化動詞の過去複数形は、この完了複数形から畳音を失った形を継承したと考えられている。

強変化動詞の過去分詞は、インド・ヨーロッパ祖語の動詞から派生した形容詞 (*verbal adjective*) に由来すると考えられている。このような形容詞では、動詞語幹がゼロ階梯を示し、語尾にアクセントが置かれるのが一般的である。ゲルマン語の強変化動詞の過去分詞は、このようなゼロ階梯の語幹を持つ、動詞から派生した形容詞から発達したと理解できる。

このようにして古典的な定説により、インド・ヨーロッパ祖語完了形からゲルマン祖語 (そして古英語) 強変化動詞 I~III 類過去単数形および過去複数形への発達が、優美な形で説明されることになる。だが、この説明を残りの強変化 IV~VII 類に当てはめても十分有効になるだろうか。答えは否である。強変化 IV, V, VI 類に進むと、この古典的な定説では説明できない現象が観察されることになる。そしてそれらは、今日の比較言語学研究でも十分に明らかにされていない、未解決の問題となっている。

強変化 IV 類動詞の古英語で見られる母音交替 (アブラウト) は、*e, æ, ā, o* である²⁴。具体例として、‘bear’ *beran* [béran], *bær* [bǽr], *bæron* [bǽ:ron], *boren* [bóren] を取り上げたい。この母音交替 (アブラウト) にどのような規則があるのか、ここからではわかりにくい、ゲルマン祖

23 ギリシア語では、完了単数・複数形双方で、アクセントの位置がインド・ヨーロッパ祖語の語形よりも前位置に移動しているのみならず、完了複数形にまで完了単数形の α -階梯の動詞語幹が一般化されている。これに対して、ヴェーダ・サンスクリット語では、完了単数・複数形双方で元々のアクセントの位置を保ち、完了複数形はゼロ階梯の動詞語幹を示す：例 *kr-* ‘do’ の完了形 *ca-kár-a* ‘I have done’, *ca-kár-tha* ‘you have done’, *ca-kár-a* ‘(s)he has done’, *ca-kr-úr* ‘they have done’。

24 強変化 IV 類に属しながらこの母音交替のパターンから逸脱するものとして、次の 2 つの動詞がある。

i. *niman* ‘take’ *nam, nōm nōmon, nāmon numen*
 ii. *cuman* ‘come’ *c(w)ōm c(w)ōmon cumen*

Campbell (1959: pp.312-313 §742)、Brunner (1965: pp.300-301 §390)、市川、松浪 (1986: 41)、Hogg and Fulk (2011: pp.243-246 §§6.58-6.60) などを参照。また、古英語 *cuman* ‘come’ の活用の特異性がどのようにして生じたかについては、Bammesberger (1984)、Kim (2019) などの論考を参照されたい。

語（かそれより少し前）にさかのぼるとよくわかるようになる。ゲルマン祖語の‘bear’という動詞は、**beran*, **bar*, **bærun*, **buren* と活用した²⁵。従って、この動詞の元々の母音交替（アプラウト）は、**er*, **ar*, **ær*, **ur* だったとわかる。ゲルマン祖語よりも前の時代（グリムの法則が適用される前の時代）にさかのぼると、この活用は **b^her-an*, **b^har*, **b^hēr-nt*, **b^hī-en* であったと考える。これらの4つの形を観察すると、**-r-*の部分の共通なので、ここから次のように一般化することができる：前ゲルマン祖語において **CeR-* という語幹の形態を持つ動詞は強変化IV類に属し、**e*, **a*, **ē*, *zero* という母音交替（アプラウト）を示す。つまり、**CVR-* というのが強変化IV類に属する動詞の語幹の形であり、その部分が **e*, **a*, **ē*, *zero* と交替するというのが、強変化IV類動詞の活用の本質だと言える。しかしながら、上で紹介した「古典的な定説」では、過去複数形の **ē* という母音階梯が上手く説明できない。インド・ヨーロッパ祖語での完了複数形は、語幹にゼロ階梯の母音を示すのであって、延長階梯母音は示さないからである²⁶。

強変化V類の古英語での母音交替（アプラウト）は、*e*, *æ*, *ǣ*, *e* である²⁷。具体例を挙げて考察したい。‘say’ *cweþan* [kwéðan], *cwæþ* [kwǣθ], *cwædon* [kwǣ:don], *cweden* [kwéden] はこのクラスに属する強変化動詞である。ゲルマン祖語の‘say’は、**cweþan* [kwéθan], **kwap* [kwáθ], **kwæðun* [kwǣ:ðun], **kweden* [kwéðen] と活用した²⁸。従って、この動詞の元々の母音交替（ア

25 当該動詞の過去複数形は、**bērun* と表記されることもある。（ゲルマン祖語の長母音の体系では、**-ē²-* [e:] と **-ē¹-* [æ:]（あるいは [e:]）の区別があったと考えられている。Ramat 1981: pp.23-25 §2.14; 1998: 389, Lehmann 1994: 23などを参照。）過去分詞における PGmc. **buren* > OE *boren* ‘born(e)’ の変化については、脚注17を参照されたい。

26 母音交替における基本母音は e-階梯 (e-grade) の *-e-* である。これに対して長母音 *-ē-* は、延長階梯母音 (lengthened-grade vowel) と呼ばれる。

27 強変化V類に属すものの、このアプラウトのパターンから逸脱を示す動詞については、Campbell (1959: pp.313-315 §743)、Brunner (1965: pp.301-303 §391)、市川、松浪 (1986: 41-42)、Hogg and Fulk (2011: pp.246-248 §§6.61-6.64) などを見るとよい。

28 語幹末の摩擦音が、不定詞と過去単数形で **-þ-* [θ] であるのに対して過去複数形と過去分詞では *-d-* [ð] となるのは、ヴェルナーの法則によるものである。脚注14と17を参照。

ブラウト)は、**e, *a, *ǣ, *e* だったと考えられる。ゲルマン祖語よりも前の時代(グリムの法則が適用される前の時代)にさかのぼると、この活用は **g^wet-an, *g^wat, *g^wēt-nt, *g^wet-en* だったと推測される。これらの4つの形を観察して、次のように一般化することができる: 前ゲルマン祖語において **CeT-* という語幹の形態を持つ動詞は強変化 V 類に属し、**e, *a, *ē, e* という母音交替(アブラウト)を示す。つまり、**CVT-* というのが強変化 V 類に属する動詞の語幹の形であり、その V の部分が **e, *a, *ē, e* と変化するというのが、強変化 V 類動詞の活用の本質だと言える。しかしながら、上で紹介した「古典的な定説」では、まず、過去複数形の *ē* という母音階梯が上手く説明できない。インド・ヨーロッパ祖語での完了複数形は、語幹にゼロ階梯母音(zero-grade vowel)を示すのであって、延長階梯母音(lengthened-grade vowel)を示さないからである。また、過去分詞は動詞語幹にゼロ階梯母音を示すことが予想されるが、ここでは *e*-階梯母音を示しているため、なぜそうなるか説明が求められるところである。

強変化 VI 類の古英語での母音交替(アブラウト)は、*a, ō, ō, a* である²⁹。具体例として、‘go’ *faran* [fāran], *fōr* [fō:r], *fōron* [fō:ron], *faren* [fāren] を取り上げて考えてみたい。ゲルマン祖語の ‘go’ という意味の動詞は、**faran* [fāran], **fōr* [fō:r], **fōrun* [fō:ron], **faren* [fāren] と活用した³⁰。従って、この動詞の元々の母音交替(アブラウト)は、**a, *ō, *ō, *a* だったと言える。これらの4つの形を観察して、次のように一般化することができる: ゲルマン祖語において **CaC-* という語幹の形態を持つ動詞は強変化 VI 類に属し、**a, *ō, *ō, *a* という母音交替(アブラウト)を示す³¹。つまり、不定詞の動詞語幹が母音 *e* でなく、母音 *a* で表示されるのが強変化 VI 類に属する動詞の語幹の形であり、その母音の部分が

29 強変化 VI 類に属するものの、この母音交替のあり方から逸脱しているように見える動詞については、Campbell (1959: pp.315-317 §744)、Brunner (1965: pp.303-305 §392)、市川、松浪 (1986: 42-43)、Hogg and Fulk (2011: pp.248-251 §§6.65-6.68)などを参照されたい。

30 現代英語の *go* は古英語の変則動詞 *gān* から発達したものであるが、現代英語の *fare* [fɛə(r)] が古英語 *faran* から発達した動詞である。ドイツ語での同語源の動詞は、*fahren* [fā:rən] — *fuhr* [fū:r] — *gefahren* [gəfā:rən] と、現代でも母音交替(アブラウト)による強変化の活用を残している。

***a**, ***ō**, ***o**, ***a** と交替するというのが、強変化 VI 類動詞の活用の本質だと言える³²。しかしながら、上で紹介した「古典的な定説」では、4つの主要部のいずれも満足に説明できない。4つの主要部が何を基にしてどのように形成されたか、明らかになっていない。ゲルマン語の強変化動詞の中で、その歴史的発達についての説明を与えるのが最も困難なのが、VI 類動詞であると言える。

-
- 31 現代英語の take — took — taken は、後で触れるように古ノルド語からの借入語だが、この動詞に強変化 VI 類の活用の痕跡を見ることができる。後期古英語の不定詞は *takan* [tákan] で、その動詞語幹はまさしく CaC- の形となっている。初期中英語 *taken* [tákan] は開音節長化 (OSL; Open Syllable Lengthening) を経て、後期中英語では *tāke* [tá:kə] となった。大母音推移 (GVS; Great Vowel Shift) を受けて、近代英語 *take* [téik] が発達する。古英語過去単数形 *tōk* [tó:k] から中英語の過去形 *tōk* [tó:k] が発達し、大母音推移を経て、初期近代英語の *took* [tú:k] が発達した。ここから短化により、後期近代英語の *took* [tók] が生じた。過去分詞は古英語の *taken* [tákan] が初期中英語の *taken* [tákan] に受け継がれ、開音節長化によって後期中英語の *tāken* [tá:kən] に発達する。ここから大母音推移を経て、初期近代英語の *taken* [téikan] が発達する。他方、現代英語の *shake* — *shook* — *shaken* は英語固有の動詞で、古英語の強変化 VI 類動詞 *scacan* [fákan], *scōc* [fó:k], *scōcon* [fó:kon], *scacen* [fáken] の活用を受け継いでいる。動詞語幹 CaC- が強変化 VI 類動詞の特徴だということに見かけ上反しているのが、*standan* ‘stand’ である (下の脚注32を参照)。しかしながら、過去単数 *stōd* 及び過去複数 *stōdon* と比較してわかることは、不定詞と過去分詞には動詞語幹の中に接中辞 (infix) -n- が挿入されているということである。英語において接中辞を用いて不定詞 (あるいは現在形、過去分詞 *standen*) が形成されるのは、強変化 VI 類の *standan* のみである。
- 32 ただし、ゲルマン祖語で不定詞が *CaRC-an となる動詞は強変化 VI 類ではなく、VII 類に属することになる。ゴート語の *falpan* ‘fold’, *haldan* ‘hold’, *ga-staldan* ‘possess’ は、過去単数形が *fai-falp* ‘I/(s)he folded’, *hai-hald* ‘I/(s)he held’, *ga-stai-stald* ‘I/(s)he possessed’ となり、母音交替 (アブラウト) ではなく畳音による過去形形成を行う強変化 VII 類に属す。(ゴート語の強変化 VII 類動詞の過去形形成に用いられる畳音は、動詞語幹頭の子音 + 母音 *ai* [e] で構成される。ゴート語では、同じ綴り <ai> で [ai] を表す場合、[e] を表す場合、そして [ɛ:] を表す場合があるために、初心者向けに [ai] を <ái> と記し、[e] を <aí> と記し、[ɛ:] を <ai> と記す慣習がある。同様に、<au> で [ao] を表す場合、[ɔ] を表す場合、[ɔ:] を表す場合があるため、[ao] を <áu> と記し、[ɔ] を <aú> と記し、[ɔ:] を <au> と記すことが慣習となっている。Wright and Sayce 1954: pp.7-8 §§10-11, Bennet 1980: p.3 §1.2, 千種 1989: p.19 §8.2 b), Lehmann 1994: p.22 §2.2, Braune and Heidemanns 2004: pp.38-46 §§20-26 など を参照。)

強変化 VII 類の古英語での母音交替(アプラウト)は、ふたつのパターンがある。過去単数、複数形に長い二重母音 **eo** を示すもので、もうひとつが過去単数、複数形に長母音 **e** を示すものである。不定詞と過去分詞が同じ語幹母音を示し、過去単数形と過去複数形も同じ語幹母音を示すのが、古英語の強変化 VII 類の母音交替(アプラウト)の特徴である。‘hold’ *healdan* [hæaldan], *hēold* [hé:old], *hēoldon* [hé:oldon], *healden* [hæalden] などがこのクラスに属する動詞である。

先に述べたように、ゲルマン祖語の強変化 VII 類動詞は、過去形を形成するのに母音交替(アプラウト)によらずに、畳音を付加していたと考えられている。ゲルマン語最古のまとまった資料を持つゴート語では、強変化 VII 類動詞の過去形は畳音を付けることで形成され、この特徴はゲルマン祖語から受け継いだものだと考えられる。ゴート語では、次のような語幹を持つ動詞が強変化 VII 類に属している。ゲルマン祖語でも同様だったと思われる。

(2)

- a. CaRC- (母音 a の後に -RC が続く語幹) : 不定詞 *haldan* ‘hold’ vs. 過去単数 **hai**-*hald* ‘I/(s)he held’ など (脚注32を参照)
- b. CāC- (長母音 ā を持つ語幹) : 不定詞 *fāhan* ‘seize’ vs. 過去単数 **fai**-*fah* ‘I/(s)he seized’ など
- c. CēC- (長母音 ē を持つ語幹) : 不定詞 *slēpan* ‘sleep’ vs. 過去単数 **sai**-*slēp*, **sai**-*zlēp* ‘I/(s)he slept’ など
- d. CōC- (長母音 ō を持つ語幹) : 不定詞 *huōpan* ‘boast’ vs. 過去単数 **hai**-*huōp* ‘I/(s)he boasted’³³ など
- e. CaiC- (二重母音 ai を持つ語幹) : 不定詞 *háitan* ‘call’ vs. 過去単数 **hai**-*hait* ‘I/(s)he called’ など
- f. CauC- (二重母音 au を持つ語幹) : 不定詞 *áukan* ‘add’ vs. 過去単数 **ai**-*auk* ‘I/(s)he added’ など

33 ゴート語の <hu> は [hʷ] という音を表す。Bennet(1959; 1980: p.4 §1.9), 千種(1989: p.20 §9.2 a), Lehmann (1994: 22-23), Braune and Heidermanns (2004: p.70 §63), Miller (2019: 28-29)などを参照。

ゴート語の強変化第 VII 類動詞には、過去形を形成するのに畳音が付くのみならず、語幹の母音が母音交替（アプラウト）を示すものが 6 例ある（Wright and Sayce 1954: pp.148-149 §314; Braune and Heidermanns 2004: pp.154-155 §§180-181; Fulk 2018: 260などを参照）。しかしながら、このようなパターンが果たしてゲルマン祖語の強変化第 VII 類動詞の活用の特徴を受け継いだものかどうかは、不明である。

(3)

a. CēC-（長母音 [e:] を持つ語幹、4 例）

不定詞 *grētan* ‘weep’ vs. 過去単数 *gai-grōt* ‘I/(s)he wept’ vs. 過去分詞 *grētans* ‘wept’

不定詞 *lētan* ‘let’ vs. 過去単数 *lai-lōt* ‘I/(s)he let’ vs. 過去分詞 *lētans* ‘let’

不定詞 *ga-rēdan* ‘reflect upon’ vs. 過去単数 *ga-rai-rōd* ‘I/(s)he reflected upon’ vs. 過去分詞 *ga-rēdans* ‘reflected upon’

不定詞 *tēkan* ‘touch’ vs. 過去単数 *tai-tōk* ‘I/(s)he touched’ vs. 過去分詞 *tēkans* ‘touched’

b. Cai-（長母音 [ɛ:] で終わる語幹、2 例）

不定詞 *saian* ‘sow’ vs. 過去単数 *sai-sō* ‘I/(s)he sowed’ vs. 過去分詞 *saians* ‘sown’

不定詞 *waian* ‘blow’ vs. 過去複数 *wai-wō-un* ‘they blew’ vs. 過去分詞 *waians* ‘blown’

このように、ゲルマン祖語に畳音による強変化 VII 類形成があったと考えられるが、それがどのような経緯で北ゲルマン語、西ゲルマン語（古英語を含む）のように母音交替（アプラウト）による過去形形成へと変化したのか、大きな問題として残っている³⁴。この問題に対する近年の

34 古英語の古いテキストには、畳音の名残を留めていると考えられる強変化 VII 類動詞の過去単数形が見られる。次の 5 例がそれに該当する。Campbell (1959: p.320 §746), Brunner (1965: pp.305-306 §394), Hogg and Fulk (2011: pp.253-255 §6.71), Fulk (2018: p.261 §12.16) などを参照。

i. <i>hātan</i> ‘command’	hēht, heht
ii. <i>lācan</i> ‘play’	leolc
iii. <i>ondrēdan</i> ‘dread’	ondreord (< * <i>drerd</i> < * <i>dredrd</i>)
iv. <i>lātan</i> ‘let’	leort (< * <i>lert</i> < * <i>lelt</i>)
v. <i>rādan</i> ‘advise’	reord

新たな取り組みとして Jasanoff (2007) と Shimozaki (2012) があるものの、未だ定説と言える説明が得られてない。

さて、古英語の強変化動詞はこのように7つの母音交替(アプラウト)のパターンに分類されるが、その多くは元々動詞だったもの — 即ち第一次動詞(primary verbs)だったもの — である(Krahe and Meid 1969: III pp.230-231 §176などを参照)。(名詞から派生された動詞(denominative verbs)は弱変化動詞に多数見出されるものの、強変化動詞には見当たらない。)中英語以降になると、他の言語(外国語)から借入された動詞は弱変化動詞として活用するのが通常であったが、これに対しては例外もある。同じゲルマン語派に属する(北ゲルマン語の)古ノルド語から借入した動詞が強変化動詞として用いられるようになったのは、さほど不思議ではないかもしれない: 例 ON þrifa > ME thrive, ON taka > ME take, ON *flinga > ME fling。しかしながら、フランス語から借入した動詞にも強変化動詞として用いられるようになった例があるのは、注目に値する: 例 OF (Old French) estriver > ME strive(n)。この点について、中尾(1972: 168-169)などを参照のこと³⁵。更には、古英語の個々の強変化動詞が中英語を経て、どのようにして近代英語の3つの主要部から成る不規則変化動詞へと発達したかについては、中島(1979: 169-178)などを参照されたい。

2.3. 歴史・比較言語学的に見た古英語強変化動詞の問題点

古英語並びにゲルマン諸語の強変化動詞が、印欧祖語の動詞体系からどのようにして発達したか、未だに解決されていない問題だと言える。元々 Jacob Grimm によって提唱されたと考えられる説 — 強変化動詞は印欧祖語の完了形(のみ)に由来するとする説 — を Prokosch (1939: pp.160-164 §§56-57) は「標準理論 (standard theory)」と呼びながらも、この説では強変化動詞の活用の特徴すべてを説明できないことを指摘

35 古英語よりもずっと古い時代、例えば西ゲルマン語がまだ諸方言に分裂していなかった時代に、ラテン語 *scribō* 'I write' から借入した動詞が、強変化動詞として用いられるようになった可能性がある。強変化 I 類動詞としての、古英語 *scrifan*, 古フリジア語 *skrīva*, 古サクソン語 *skrīban*, 古高ドイツ語 *skrīban* 'write' がその反映形である。Fulk (2018: pp.256-257 §12.12) などを参照。

し、異なる説明を提案している(2.2節の脚注21参照)。Prokoschによれば、強変化動詞の活用形には印欧祖語の完了形を反映したもののほかに、印欧祖語のアオリスト形(aorists)を反映するものがあるということで、強変化動詞は完了形とアオリスト形が混交したものであるということである。以前から、そして近年になっても、「標準理論」(あるいは「古典的な定説」、即ち強変化動詞は完了形(のみ)を反映するとする考え)を採る学者、そしてProkoschのように強変化動詞は完了形とアオリスト形の混交に由来するという考えを採用する学者双方がいて、この議論には決着がついてない³⁶。更には、より新しい説明図式として、田中(2013a, 2013b, 2017)やTanaka(2020)などは、強変化動詞は印欧祖語の完了形と未完了形(imperfects)が混交して生じたという説を提唱している。強変化動詞の歴史的発達のあり方について、今後も議論が続くと思われる。

参考文献

- Bammesberger, Alfred (1984) "Die urgermanischen Aoristpräsentien und ihre indogermanischen Grundlagen." In Untermann, Jürgen and Bela Brogyanyi (eds.) *Das Germanische und Rekonstruktion der Indogermanischen Grundsprache*. Amsterdam/Philadelphia: Benjamins, 1-24.
- Bammesberger, Alfred (1986) *Der Aufbau des germanischen Verbalsystems*. Heidelberg: Winter.
- Bennet, William H. (1959) "The phonemic status of Gothic *w lu q*." *Language* 35, 427-432.
- Bennet, William H. (1980) *An Introduction to the Gothic language*. New York: The Modern Language Association of America.
- Braune, Wilhelm and Frank Heidermanns (2004) *Gotische Grammatik: Mit dem Lesestücken und Wörterverzeichnis*, 20th edition. Tübingen: Niemeyer.
- Braune, Wilhelm and Ingo Reiffenstein (2004) *Althochdeutsche Grammatik*, Vol. 1: *Laut- und Formenlehre*, 15th edition. Tübingen: Niemeyer.
- Brunner, Karl (1965) *Altenglische Grammatik*, 3rd edition. Tübingen: Niemeyer.
- Bybee, Joan (2015) *Language change*. Cambridge: Cambridge University Press.

36 完了形のみに由来するという立場を取る論考として Streitberg (1896: esp. pp.81-83 §96), Cowgill (1960: esp. 488-489 §8), Jasanoff (1994: 272-274), Schumacher (2005), Ringe (2006: pp.184-194 §3.4.3 (ii); 2017: pp.209-218 §3.4.3 (ii)) などがある。他方、完了形とアオリスト形の混交から成るとする見解を示したものに、Collitz (1912: 199), Hirt (1932: esp. p.141 §115), Bammesberger (1986: p.49 §5.5.3), Mottausch (2000) などがある。

- Campbell, Alistair (1959) *Old English grammar*. Oxford: Clarendon Press.
- Campbell, Lyle (2013) *Historical linguistics: An introduction*, 3rd edition. Edinburgh: Edinburgh University Press.
- 千種眞一 (1989) 『ゴート語の聖書』 大学書林.
- Collitz, Hermann (1912) *Das schwache Präteritum und seine Vorgeschichte*. Göttingen: Vandenhoeck und Ruprecht.
- Cowgill, Warren (1960) "Gothic *iddja* and Old English *ēode*." *Language* 36, 483-501.
- Fertig, David (2019) "Morphological change through phonological analogy: 2nd Person Singular -s → -st." *Journal of Germanic linguistics* 31, 1-42.
- Fulk, R. D. (2018) *A grammar of the Early Germanic languages*. Amsterdam: Benjamins.
- Hirt, Hermann (1932) *Handbuch des Urgermanischen*, Part II *Stammbildungs- und Flexionslehre*. Heidelberg: Winter.
- Hock, Hans Henrich (1991) *Principles of historical linguistics*, 2nd edition. Berlin/New York: Mouton de Gruyter.
- Hogg, Richard M. (1992) *A grammar of Old English*, Vol. 1: *Phonology*. Oxford: Blackwell.
- Hogg, Richard M. and R. D. Fulk (2011) *A grammar of Old English*, Vol. 2: *Morphology*. Oxford: Blackwell.
- 市川三喜、松浪有 (1986) 『古英語・中英語初歩』 研究社.
- Jasanoff, Jay H. (1994) "Germanic (le germanique)." In Bader, Françoise (ed.) *Langues indo-européennes*, Paris: CNRS, 251-280.
- Jasanoff, Jay H. (2007) "From reduplication to ablaut: The class VII strong verbs of Northwest Germanic." *Historische Sprachforschung* 120, 241-284.
- Kim, Ronald I. (2019) "Old English *cyme* and the Proto-Indo-European aorist optative in Germanic." *Transactions of the Philological Society* 117, 96-111.
- Krahe, Hans and Wolfgang Meid (1969) *Germanische Sprachwissenschaft*, 3 vols., 7th edition. Berlin/New York: Walter de Gruyter.
- Lass, Roger (1992) "Phonology and morphology." In Blake, Norman (ed.) *Cambridge history of the English language* Vol. II: *1066-1476*. Cambridge: Cambridge University Press, 23-155.
- Lehmann, Winfred P. (1994) "Gothic and the reconstruction of Proto-Germanic." In König, Ekkehard and Johan van der Auwera (eds.) *The Germanic languages*. London/New York: Routledge, 19-37.
- Miller, Gary D. (2019) *The Oxford Gothic grammar*. Oxford: Oxford University Press.
- 三好助三郎 (1977) 『新独英比較文法』 郁文堂.
- Mottausch, Karl-Heinz (2000) "Das Präteritum der 4. und 5. starken Verbklassen im Germanischen." *North-western European language evolution* 36: 45-58.
- 中島文雄 (1979) 『英語発達史 (改訂版)』 (岩波全書 143) 岩波書店.
- 中尾俊夫 (1972) 『英語学体系 9 : 英語史 II』 大修館書店.
- 中尾俊夫 (1979) 『英語発達史』 篠崎書林.
- 中尾俊夫、寺島廸子 (1986) 『図説英語発達史』 大修館書店.

- 小野茂、中尾俊夫 (1980) 『英語学体系 8 : 英語史 I』大修館書店.
- Perridon, Harry (2001) "On the origin of *ū* in verbs of the type *lūkan*." In Watts, Sheila, Jonathan West, and Hans-Joachim Solms (eds.) *Zur Verbmorphologie germanischer Sprachen*. Tübingen: Niemeyer, 29-37.
- Prokosch, Edward (1939) *A comparative Germanic grammar*. Philadelphia: Linguistic Society of America.
- Ramat, Paolo (1981) *Einführung in das Germanische*. Tübingen: Niemeyer.
- Ramat, Paolo (1998) "The Germanic languages." In Ramat, Anna Giacalone and Paolo Ramat (eds.) *The Indo-European languages*. London/New York: Routledge, 380-414.
- Ringe, Don (2006) *A linguistic history of English*, Vol.1: *From Proto-Indo-European to Proto-Germanic*. Oxford: Oxford University Press.
- Ringe, Don (2017) *A linguistic history of English*, Vol.1: *From Proto-Indo-European to Proto-Germanic*, 2nd edition. Oxford: Oxford University Press.
- Ringe, Don and Ann Taylor (2014) *A linguistic history of English*, Vol.2: *The development of Old English*. Oxford: Oxford University Press.
- Schumacher, Stefan (2005) "Langvokalische Perfekta' in indogermanischen Einzelsprachen und ihr grundsprachlicher Hintergrund." In Meiser, Gerhard and Hackstein, Olav (eds.) *Sprachkontakt und Sprachwandel. Akten der XI. Fachtagung der indogermanischen Gesellschaft, 17.-23. September, Halle an der Saale*. Wiesbaden: Reichert, 591-626.
- Shimozaki, Masatoshi (2012) "Die Ablaut der 7. Reihe starker Verben im Nord- und Westgermanischen: Ursprung und Unterscheide in den Einzelsprachen." *Beiträge zur Geschichte der deutschen Sprache und Literatur* 134, 307-329.
- Streitberg, Wilhelm (1896) *Urgermanische Grammatik*. Heidelberg: Winter.
- 田中俊也 (2013a) 「ゲルマン語強変化動詞 IV, V 類の過去複数形をめぐる考察」『英語英文学論叢』(九州大学英語英文学研究会) 第63集, 67-112.
- 田中俊也 (2013b) 「ゲルマン語強変化動詞 V 類過去複数形に散発的に見られる語根末摩擦音有声化について : *wes- 'be stay, dwell' の事例を中心に」『歴史言語学』(日本歴史言語学会) 第2号, 3-20.
- 田中俊也 (2017) 「ゲルマン語強変化動詞および過去現在動詞 IV, V 類に見られる形態的差異について : Schumacher 論考の批判的考察と形態的混交説からの提案」『言語研究』(日本言語学会) 第152号, 89-116.
- Tanaka, Toshiya (2020) "On the distribution of the strong preterite plural and the preterite-present present plural forms in the Proto-Germanic verb system." 『英語英文学論叢』(九州大学言語文化研究院英語科) 第70集, 33-51.
- Tichy, Eva (2006) *A survey of Proto-Indo-European*. Bremen: Hempen.
- Vine, Brent (1985) "On the Germanic Type *lūkan*." *Zeitschrift für vergleichende Sprachforschung* 98, 60-81.
- Weiss, Michael (2009) *Outline of the historical and comparative grammar of Latin*. Ann Arbor/New York: Beech Stave Press.
- Welna, Jerzy (2017) "Morphology." In Brinton, Laurel J. and Alexander Bergs (eds.) *The his-*

- tory of English*, Vol. 3: *Middle English*. Berlin/New York: Mouton de Gruyter, 50-75.
- Wright, Joseph and O. L. Sayce (1954) *Grammar of the Gothic language*, 2nd edition. Oxford: Clarendon Press.
- Wright, Joseph and Elizabeth Mary Wright (1925) *Old English grammar*, 3rd edition. London: Oxford University Press.
- Wright, Joseph and Elizabeth Mary Wright (1928) *An elementary Middle English grammar*, 2nd edition. London: Oxford University Press.